

紙コップを用いた手作り楽器の可能性に関する一考察

Handcrafted Musical Instruments Using Paper Cups

児童学科
Dept. of Child Studies

齋藤 由香利
Yukari Saito

根津 知佳子
Chikako Nezu

抄 録 子どもたち自身による楽器作り経験の有用性は広く認められており、楽器制作活動または手作り楽器を用いた活動実践に主眼を置いた研究報告はこれまでもなされているが、素材に用いられる紙コップに着目し、その特性によって生み出せる楽器の可能性を論じたものは見当たらない。本稿では、教職に関する授業における紙コップを用いた楽器制作課題をとおして、紙コップから手作りできる楽器の種類の豊富さと、楽器制作に紙コップを用いる可能性と課題について考察した。課題提示時に「楽器とは何か」という発問や、ホルンボステル＝ザックス分類の解説を行った結果、提出された楽器 99 点は当該分類の全 4 部門を網羅する 20 種類に昇った。触覚をとおした音の認知や楽器の装飾にも紙コップの特性が生かされた。紙コップの形状とその立体性、強度、加工のしやすさという特徴が多種類の楽器を生みだすことに繋がったと示唆された。

キーワード：手作り楽器、楽器制作課題、楽器分類

Abstract This paper discusses the abundance of musical instruments that can be handcrafted using paper cups as well as the possibilities and challenges of using paper cups to craft musical instruments based on assignments presented in a teaching-related class. As a result of asking the question, “What is a musical instrument?” and explaining the Hornbostel–Sachs classification when the assignment was presented, 99 instruments were submitted, which encompassed all four categories of the classification and totaling 20 types. The characteristics of the paper cups were utilized in the perception of sound through the sense of touch and in the decoration of the instruments. The shape of the paper cup as well as its three-dimensionality, strength, and ease of processing may result in the creation of diverse musical instruments.

Keywords: handcrafted musical instruments, assignments to create musical instruments, musical instrument classification

1. はじめに

1-1. 研究の背景

保育所保育指針及び幼稚園教育要領は、保育または幼児教育を通じて育みたい資質・能力を発達の側面から5つの「領域」にまとめ、そのうちのひとつ「表現」については「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」¹⁾²⁾と示している。保育者養成系や教員養成系のカリキュラムにおいては、この領域「表現」に関する科目として授

業が設置されている。本学児童学科のコースカリキュラムでは、2024 年度より「子どもと表現（旧音楽理論）」として位置づけており、教職課程の学生の必修科目となっている。

1-2. 授業概要

当該授業第6回の「楽器の構造・分類」をテーマとした授業においては、楽器に対する知識を深めることを目的とし、ホルンボステル Erich Moritz von Hornbostel (1877–1935) とザックス Curt Sachs (1881–1959) による楽器の体系的分類を取り扱っ

た。

西欧において18世紀まで、楽器は「弦楽器」「管楽器」「打楽器」に分類されてきた。これは西欧において実際に用いられてきた楽器に基づいた分類であり、理解しやすいという利点からか、現在でも習慣的に用いられている³⁾。しかし、区分の原則が部門によって異なることが問題点として挙げられる。楽器学では、世界各地の楽器に通用する分類法を確立することがまず求められ、マイヨン Victor-Charles Mahillon (1841-1924) が振動体の形体を最上位の分類原則とし、「自鳴楽器」「膜楽器」「弦楽器」「管楽器」の4部門に大別した⁴⁾。このマイヨンの分類を基礎としたのが、ホルンボステルとザックスの体系的分類である。彼らは1914年に楽器を発音原理によって「体鳴楽器」「弦鳴楽器」「膜鳴楽器」「気鳴楽器」の4部門に大別し、さらに奏法や楽器の形状によって計344に細分化した⁵⁾。彼らの分類は現在、博物館などにおいて、世界で最も広く採用されている。

授業においては、ホルンボステルとザックスの体系的分類が楽器を発音原理によって大きく4部門に分けていることについて解説し、それぞれの部門にどのような楽器が属するのかを例示し、発音原理に加えて楽器の素材、形、奏法の違いによって、それぞれの楽器特有の音が生み出されていることを確認した。

また、授業では、冒頭での「楽器とは何か」という発問を重視した。『新編 音楽中辞典』の「楽器」の項には「狭義にはピアノやフルートなど、音楽の演奏するために用いる道具の総称。広義には拍子木や梵鐘、風鈴なども含めて、音を出すための道具（音具）の総称」⁶⁾と規定されている。これに従えばタイプライターは一般に楽器とも音具ともみなされないが、アンダーソン Leroy Anderson (1908-1975) が作曲した《タイプライター》においては、

音楽を演奏するために用いられているため楽器とみなすことが可能である。

この授業ののち、子どもたちを対象とした楽器の制作を課題とした。子どもたち自身による楽器作りの経験については、オルフ・シュールベルク理論が「簡単な楽器を自分たちで作ることは、音への認識と感覚を深めるためにたいへんよい経験」というオルフ Carl Orff (1895-1982) 自身のことばを引用し奨励しているように⁷⁾、その有用性が広く認められている。

本楽器制作課題には以下の条件を設けた。まず、メインとなる素材として紙コップを使用すること（複数使用も可、ただしひとつはなるべく元の形を保ったまま使用）である。紙コップは、子どもが手に入れやすい身近なもののなかでも、ある程度の強度がありながら加工がしやすく、さらに立体的であることから、さまざまな楽器を生み出す可能性を備えていると考えたためである。また、紙コップの中にただ物を入れて振るだけのもの（マラカス）は除外とした。それ以外については、88名の受講生のアイデアが類似することを防ぎ、個々の受講生が持つアイデアを生かせるよう制作の条件は設けずに、対象年齢も自由とした。

提出物は楽器そのものではなく、楽器全体と音を出している様子を収めた動画とし、課題提示から提出までの期間は約1ヶ月とした。課題提出後の授業においては、提出された手作り楽器をクラス内で相互に見せ合ったうえで、それらの楽器を用いた合奏を行った。

ここで本研究のキーワードである「手作り楽器」に関する先行研究について確認する。日本国内の論文・研究データの検索が可能な国立情報学研究所が運営するデータベース CiNii において、フリーワードに「手作り楽器」を入れて検索すると50本の論文が検出されるが、それらは手作り楽器制作活動ま

表1 提出楽器一覧、丸括弧内は提出された楽器の数

弦鳴楽器：ギター(23)、琴(2)、ベース(2)、三味線(1)、ハープ(1)、オリジナル楽器(1)
体鳴楽器：でんでん太鼓(16)、ギロ(9)、ハンドベル(7)、カスタネット(4)、マラカス(4)、 オリジナル楽器(2)、スタンド付きシンバル(1)、シンバル(1)、ラチェット(1)
膜鳴楽器：太鼓(16、そのうち両面太鼓が1)、クイーカ(3)、カズー(1)
気鳴楽器：笛(4)

たは手作り楽器を用いた活動実践に主眼を置いているものの、手作り楽器の素材の特性、特に紙コップの特性に着目し、その特性によって生み出すことのできる楽器の可能性を論じたものは見当たらない。そこで本稿では、一連の授業から見出された、紙コップから手作りできる楽器の種類の豊富さと、楽器制作に紙コップを用いる可能性と課題について考察する。楽器制作課題の実施とその考察を齋藤（1－3）が担当し、まとめを根津（1および4）が担当する。

2. 実施内容

2－1. 提出された楽器の概要

表1は、提出された楽器をホルンボステルとザックスの体系的分類に従って分類したものである。各楽器名は制作者の申告に従ったが、申告がなかった楽器に関しては、同じ構造を持つ楽器を制作した他の受講生の呼称に従った。また「ラッパを作った」と申告された楽器が2点あったが、発音原理と奏法からひとつを「クイーカ」、もうひとつを「カズー」として分類した（当該楽器については3－1－3.を参照されたい。前者と同じ構造をもつ、楽器名の申告のなかった2点もクイーカとした）。また制作者から楽器名の申告がなく、既存の楽器にも相当しないものは「オリジナル楽器」とした。複数の楽器の機能を持ち合わせた楽器があったこと、複数の楽器を制作した受講生がいたことから、楽器総数は受講生総数の88を超え99点となっている。

2－2. 合奏

提出された楽器によって演奏可能で、子どもに馴染みのある曲という視点のもと合奏曲を選定し、日本では「天国と地獄」の愛称で知られ、運動会のBGMとして親しまれているオフエンバック Jacques Offenbach（1819-1880）作曲のオペラ・ブフ《地獄のオルフェ》の〈地獄のギャロップ〉（ハ長調）とした。

楽譜は土屋真仁監修『子どもの笑顔がはじける2～5歳児のかんたん器楽合奏曲集』（2022 ナツメ社）を使用した。本授業の合奏においては、提出された楽器のうち有音程楽器である弦鳴楽器と笛が、オブリガートと曲の盛り上がる箇所において主旋律ないし伴奏と音の一部を担う「鍵盤ハーモニカ」「鉄琴」のパートを担当することとした。ただし既存の

楽器よりも演奏の難易度が高いことを加味して、楽譜に書かれた旋律は2音（「ソとラ」ないし「ドとソ」）に絞って簡略化した。その他の体鳴楽器と膜鳴楽器は、リズムパートの「鈴」「カスタネット」「タンブリン」「ウッドブロック」「小太鼓」「大太鼓」を分担することとした。ラチェット、カズー、でんでん太鼓はリズムを刻むことが困難であるため、曲が盛り上がる箇所においてクレッシェンドをかけながら持続的に音を出すこととした。主旋律と伴奏を担う「ピアノ」パートは、教室に設置されているグランドピアノで筆者が担当した。また複数の楽器または複数の機能を持つ楽器を制作した受講生に関しては、各々が希望する楽器を担当することとした。

授業内で25分間、パート毎に分かれて練習したのち、2回通して合奏を行った。教室における楽器群の配置は、各楽器の人数と出せる音量を加味し、バランスよく聞こえるよう図1のとおりとした。

ピアノ		
ラチェット/カズー カスタネット群 ギロ群 太鼓群	笛群 ハンドベル群 弦鳴楽器群	クイーカ群 でんでん太鼓群

図1 合奏隊形 ページ上方が教室における前方

2－3. 省察

合奏ののち、受講生に以下の設問を提示し、一連の活動を踏まえた省察を提出してもらった。

- ①楽器制作課題において、工夫したのはどのようなことですか。
- ②本日の授業を踏まえ、今後子どもと楽器をつくる機会があった際、心がけたいと思うことは何ですか。

3. 提出された楽器の特性や工夫の考察

本節では、提出された手作り楽器の特性や工夫について考察する。

3－1. 楽器単体の考察

3－1－1. 弦鳴楽器

ギター／箏として提出された楽器は、紙コップの飲み口や脚の部分に切れ込みを数か所入れ、そこに

輪ゴムを輪の形のまま引っ掛けたものが 21 点である(残りの 2 点の構造は次段のベース／三味線と同じであるが、制作者の申告に従いギターとしてカウントした)。これらは弾くと違った高さの音が出る複数の弦を備えているが、その音高の違いは、ゴムの張力の違いによって生みだされている。また弦の一本ずつに色の違うゴムを使用することで、音程の違う弦を視覚的に捉えられるよう工夫を施したものもある。

ベース／三味線は、紙コップの底の中央に小さく穴を空け、そこに一箇所を切って開いた輪ゴムの片方の端を通し、紙コップの内側で留めることで作られている。紙コップと反対側のゴムの端を引っ張りながらゴムを弾くことで音が発せられる。ゴムは開いて使用したことにより長さが出ているため、ギター／箏に比べてかなり低い音域の音を出すことが可能である。ゴムを引っ張る力を変えることによって、随時音高を変化させられる点もギター／箏とは異なる。また弾いた弦(ゴム)の振動は紙コップに伝わるため、紙コップを持っている手の触覚でも音を認識できる点に特徴がある楽器である。

ハープは、バルーンアートに使用する長い風船を膨らませたのち U 字型に曲げ、2つの直線部分に輪ゴムを開いて張ったもので、風船の両端には底面をくり抜いた紙コップがとおされている。この紙コップを耳や口に当てながら弾くことで、音の振動を顔で感じられるよう工夫されている。

オリジナル楽器は、2つの紙コップをゴムでつないだもので、紙コップを打ち合わせると打楽器として使用できるが、紙コップの両端を一瞬強くひっぱり、すぐに緩めることで、ゴムが伸び縮みした「びよん」という音も出すことができる。この楽器には、弦以外の媒体(ピック、指、撥など)を介さずに弦を鳴らすことができるという特徴がある。

3-1-2. 体鳴楽器

32 点の体鳴楽器のうち、半数にあたる 16 点は「でんでん太鼓」である。いずれも太鼓部分に紙コップが使用され(そのため、膜鳴楽器ではなく体鳴楽器として分類した)、その紙コップ部分は平らにつぶされたものと、元の形を保ったものがある。玉にはプルタブなどゴミを再利用したもの、どんぐりなど自然のものを使用したもの、発砲スチロールの玉を使用しケガをしないように配慮したもの、ビーズを使用し装飾性を高めたものが見られる。紙

コップの形体や玉の種類・数によって見た目も音色も変わるため、それらの選択により個性ある楽器を作ることができる。

ギロは紙コップの側面に凹凸のあるビーズをとりつけ、それを割り箸で擦ることで音を出すものが 1 点と、紙コップの底にストロー大の穴を空け、そこにストローの蛇腹部分を出し入れすることで音を出すものが 6 点である。後者においては、課題に取り組んだ時期が梅雨であったこともあり、ギロから出る音をカエルの鳴き声に見立て、カエルの装飾を施したのが見られる。これは本物のカエルの鳴き声と比較する、《かえるの合唱》の合奏に取り入れるなど、多くの活動展開が期待できる楽器である。またストローを出し入れするとカエルの首・手足が伸び縮みするギミックを施したものは、視覚的にも楽しめるものである(図2参照)。

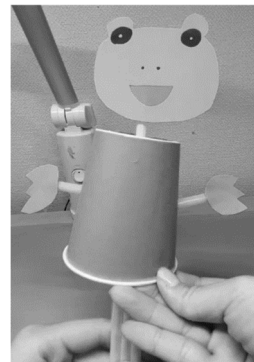


図2 カエルギロ

ハンドベル 7 点のうち、3 点は既存の楽器であるハンドベルのように、振ると内部の振り子が鐘の部分で打ち音が鳴るもので、4 点は振り子部分に既製品の鈴を利用し、発音に鐘の振動を必要としないものである。前者は、鐘の部分が紙コップであるため、カタカタという音が鳴る楽器である。後者において紙コップは、鈴から発せられた音を覆い、柔らかくする機能を果たしている。振り子部分から長方形の紙を垂らし風鈴に見立てたものや、紙コップ部分に黄色の色紙を貼り、リボンの持ち手を付けてクリスマスツリーの飾りとしても使用できるようにしたものなど、個々に装飾が工夫されていたことから、季節の行事において使用することが期待できる。

またこの後者のハンドベルと似た仕組みで制作されたのが、スタンド付きシンバルである。ベル(厚

紙製)の裏に既製品の鈴を取り付けることで、叩くと鈴が鳴るように作られている。このシンバルは紙コップを使用していないが、共に提出された、紙コップを用いた太鼓2種と合わせてドラムセットを成している。本物らしさや音色を増やす工夫が見られるものである。

シンバルは、2つの紙コップの飲み口にCDを取り付けたもので、紙コップを両手にひとつずつ持ってCDの面を打ち付けることで音が出る。中にビーズが入っていることからマラカスとしても使用でき、更にCDの面を撥で叩くと太鼓にもなる、3つの機能を持つものである。

カスタネットは、図3において線を引いた箇所には切り込みを入れ、切り出された箇所をひっくり返して持ち手部分としたものである(図4)。持ち手を握り、本体を上からまたは下から軽く叩くことで、2つの部位が打ち合わさり音が鳴る。紙コップのみで作成できる点が注目される。



図3 切り込みを入れる部分

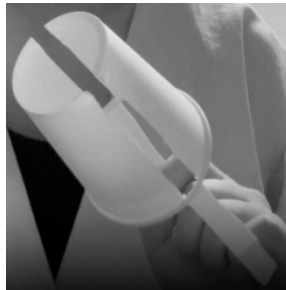


図4 カスタネット

マラカスは、先述のシンバル、割り箸を切ったものを紙コップの中に入れてでん太鼓、ビーズを中に入れた太鼓2点の計4点をカウントした。それぞれ振るとマラカスとしても使用できるものであるが、太鼓においては膜を叩いたときにも中のビーズが跳ねる音が鳴るという発見があった。

ラチェットとは、木製か金属製の丈夫な舌と歯車の歯が当たるように、歯車もしくは舌をハンドルによって回転させて音を鳴らす打楽器である⁸⁾。今回提出された楽器は、段ボールの表面の紙を剥がすと現れるギザギザした段を紙コップの内側に一周させて貼り付け、その段にトイレットペーパーの芯を一部切り出して作成した舌があたるように固定し、トイレットペーパーの芯にハンドルを取り付けたものである。ハンドルには割り箸が4本使用され、輪ゴ

ムによって組み上げられている(図5)。ハンドルを回すと、舌が段に当たりカタカタと音が鳴る。その音だけでなく、手に伝わる振動も楽しめる、またハンドルを回すという日常生活にない動作ができる楽器である。

オリジナル楽器とした2点の楽器のうち、ひとつは紙コップと紙コップの間に皺を作ったアルミホイルを挟み、一方の紙コップを回転させることで摩擦音を出すものである。もうひとつは、制作者が「からころべんべん」というオリジナルネームをつけた楽器で、紙コップの底面にゴム風船を張り、そこにビーズを先端に取り付けた紐を数本、テープで留めて作られる。ゴム風船を指で弾くか、紙コップの中に手を入れて振ることで、ビーズが紙コップの側面にあたり音が鳴る楽器である。



図5 ラチェット

3-1-3. 膜鳴楽器

太鼓はいずれも紙コップを胴とし、その飲み口に膜を張ったものである。膜の素材としては厚紙、コピー用紙、ティッシュ、ラップ、ビニール、ゴム風船、アルミホイル、プラスチックの板が用いられ、この素材の違いが音の違いを生む。なかでもゴム風船を膜に使用したものは残響のある、本物らしい音を生み出す点が注目される上、飲み口にゴム風船を取り付ける際の張力の調整により音程を変化させられるため、ティンパニのような有音程の太鼓となり得る。また紙コップの底面を叩く太鼓とセットにした2点、大きさの違う紙コップを使用した太鼓と組み合わせた1点は、叩く面の大きさによって音色や音の高さが変化することを体感できるものである。

演奏にあたって、13点は撥を使用した。撥の棒部分には割り箸、ストロー、鉛筆が使用され、ヘッドが付けられたものもあった。特に消しゴムをヘッドとした撥とゴム風船の膜は相性がよく、叩くと良

い音が鳴るだけでなく、弾性で撥が跳ね返るため、弾む感触を楽しむことができる。

また1点、スネアドラムのスナッピーにあたるものを付けた太鼓がある。これはストローを鉛筆削りで削ってコイル状にし、それを膜の裏に貼ることで音に変化を与えたものである。またこの太鼓には、撥として使用する割り箸を鉛筆削りで削り両端に丸みを持たせて安全性を高める工夫や、太鼓にストローを取り付け、撥を差し込んで収納できるようにするという工夫も見られる。

クイーカとは、片面太鼓の膜の中央に内側から棒を垂直に付けた楽器で、湿らせた手や布で棒を擦ると膜が振動して音が鳴る膜鳴楽器である。今回提出された楽器は3点とも紙コップを片面太鼓に見立て、その膜（紙コップの底面）の中央にタコ糸やモールを取り付けたものである。タコ糸は爪や湿らしたティッシュで、モールは割り箸で挟んで擦ることで音が出る。既存のクイーカと違い、タコ糸やモールは外側に取り付けられているため、擦る動作は行いやすい。またタコ糸を湿らしたティッシュで擦ったものは鶏の鳴き声のように、モールを割り箸で擦ったものは犬の鳴き声のように聞こえる音が出ることから、それぞれ鶏と犬の装飾が施されている（図6）。

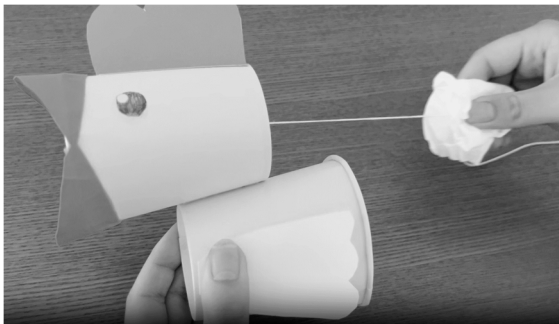


図6 鶏クイーカ

カズーとは、金属製またはプラスチック製の葉巻型の管からなる楽器である。その一端を咥えて声を発すると、管上部の大きな穴に取り付けられた円盤状のディスク（動物の皮膜またはポリプロピレンフィルム製）が振動し、人声を増幅させつつ、ざわざわとした質感を与える⁹⁾。今回提出された楽器は、紙コップの底面をくり抜き、そこにクッキングシートを張ったもので、このクッキングシートの膜に向

かって声を発すると膜が振動し、人声にざわざわとした質感が付加される。自分の声に変化する楽しさが味わえる楽器である。

3-1-4. 気鳴楽器

気鳴楽器は一種類で笛である。吹き口にストローを使用し、息を吹き込む方とは反対側のストローの端をつぶしたうえで紙コップに空けた穴の縁に固定したもので、ストローに息を吹き込むと穴の縁に息があたり、ピーと音が鳴る。紙コップの飲み口を手で押さえ、開閉具合を調節することで音程の変化が可能となる（図7）。穴の大きさ、ストローのつぶし具合、ストローの固定位置のバランスが上手くとれないと音が鳴らないため、制作の難易度は高いが、息を使って音を出せる貴重な楽器である。

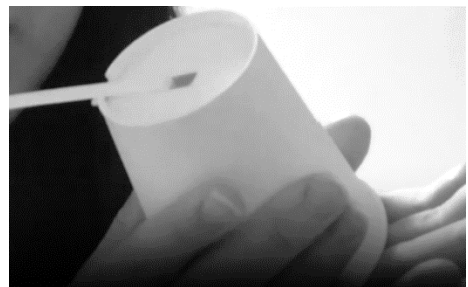


図7 笛

3-1-5. 複合楽器

3-1-1. において紹介した、打楽器とゴムが伸び縮みする音が出る楽器を兼ねたもの、3-1-2. で紹介した、でんでん太鼓／太鼓とマラカス、シンバルとマラカスと太鼓を兼ねたもののように、2～3の機能を併せ持った楽器は5点見られる。残る1点は3-1-2. で紹介した、ストローの蛇腹部分を利用したギロのひとつで、ストロー部分に笛の機能を持たせている。これはストロー上部の先端1.5cmをつぶし、左右から斜めにカットして尖らせたのち、しごいて柔らかくすることでダブルリードとしたもので、咥えて吹くとブーと音が鳴る。制作者はこの音を豚の鳴き声に見立て、楽器の片面には豚の飾り、もう片面にはギロの音にあわせてカエルの飾りをつけている。複数の音を出せることには、子どもを飽きさせない効果が期待できる。

3-1-6. 音具

以上、3-1-1. と3-1-2. において、3つのオリジナル楽器について紹介した。これらの楽

器は決まった音程を奏でたり、安定した音色でもって決まったりリズムを刻んだりすることはできないことから音楽の演奏には向かないが、音を出す目的のもと作られたため、1. で提示した「楽器」の定義によれば音具であり、広義の楽器といえる。授業の「楽器の構造・分類」の回において楽器とは何かにについて考えたことが、これらの楽器を生むことに繋がった可能性が示唆される。

3-2. 合奏

合奏活動の詳細は2-2. のとおりである。2回の通し演奏は教室前方で録画した。以下で言及する音のバランスは、その録画の音声データを基に記述している。

演奏についての所見を述べると、まず弦鳴楽器が全体の約3分の1を占めていたにも関わらず、その音はリズム楽器の音に埋もれ、聞きとめることは困難な結果となった。また人数が少ないにも関わらずカスタネットの音は非常によく聞こえた一方で、その約4倍にあたる数の太鼓の音は微かに聞こえる程度であった。いずれも教室前方に配置したならば違ったバランスになったであろうが、発表会のように聴き手がいる場合を除いては、まず子どもたち同士が色々な音を聴きながら合奏を楽しめるよう、円状の隊形をとるという発想が生まれた。

また、有音程の手作り楽器（弦鳴楽器と笛）を用いて旋律を奏でることに課題が残った。演奏者が子どもであればなおさら、演奏が困難であることは容易に想像がつく。

ところで、楽器が壊れるという事態もいくつか起こった。これは紙コップが湿気を吸い、強度が下がったことに起因し、特に輪ゴムやゴム風船を張った弦鳴楽器や太鼓において、ゴムの張力に耐えきれずに紙コップが歪んでしまった。しかし、楽器の強度をあげるために、あらかじめ紙コップをいくつも重ねて作成していた例もあり、解決策として共有することができた。

省察の設問②（2-3. 参照）においては、5名の受講生が音の楽しみや達成感を得ることに繋がるため、制作した楽器による合奏を行いたいと記述した。必ずしも合奏向きではない楽器もあるが、それらは例えば絵本の効果音として使用する、動物の真似に使用するなど、他の活動に用いることも可能である。

4. まとめ

「子どもと表現（旧音楽理論）」では、領域「表現」に関する発達段階や表現行為の様相などの専門的事項の知識を、具体的な映像や資料に基づいて身に付けるとともに、保幼小連携を視野に入れた表現活動の意義について実践的に学ぶことを重視している。とりわけ、就学前の養育・保育・教育・療育などにおける具体的な事例を通して、音楽表現の多様性や乳児期から児童期までの発達様相をふまえた音楽表現行為の特性と、乳幼児期の表現活動を支える基礎的な知識・技能を習得することを目指している。

本研究では、身近な素材である紙コップを用いた楽器作りの活動を通して、理論的にも実践的にも楽器の分類の知識を深めることのできる可能性を見出すことができた。さらには、ホルンボステルとザックスの体系的分類の知識を基盤として、民族音楽の特性や活用される楽器の理解へと学習を拡げることにも可能となった。それは例えば、同じ「膜鳴楽器」であっても、その地域の動物や植物の違いによって楽器の形態も音色も異なることに気づき、そのことにより異文化理解を深めることができることを意味している。

一方、身近な素材を活用した楽器作りの問題点として、使用後はゴミと化することを避けることができない点が挙げられる。これは、紙コップの耐久性の問題でもあり、楽器への愛着の問題ともいえる。両者は、表裏一体であり、装飾の工夫などによって育まれる楽器への愛着は、長く活用できる楽器作りに対する内発的動機付けに結びつくことが、制作後の合奏活動によって示唆された。

当該授業の第12回では、カンボジアの小学校に鍵盤ハーモニカを贈呈する支援について、SDG'sの



図8 SDG'sの目標12

視点で考える授業を行っている。したがって、当該授業の学びは、SDG's の目標 12 とも連動した内容としても位置づけることができる。

引用・参考文献

- 1) 厚生労働省：保育所保育指針（平成 29 年度告示）解説，173（2018）
- 2) 文部科学省：幼稚園教育要領（平成 29 年度告示）解説，223（2018）
- 3) 郡司すみ：世界の音 ―楽器の歴史と文化―，講談社，東京，56（2022）
- 4) Hornbostel, E. M. von and Sachs, C.: Systematik der Musikinstrumente: Ein Versuch, *Zeitschrift für Ethnologie*, 4-5, 555 (1914)
- 5) 前掲 Hornbostel et al., 553-590 (1914)
- 6) 嶋和彦：楽器，新編 音楽中辞典，海老澤敏・上参郷祐康・西岡信雄・山口修監修，音楽之友社，東京，141（2002）
- 7) 星野圭朗：オルフ・シュールベルク理論とその実践 ―日本語を出発点として―，全音楽譜出版社，東京，29（1979）
- 8) Blades, J., & Holland, J. (2001). Ratchet. *Grove Music Online*, <https://www.oxfordmusiconline.com/grovemusic/view/10.1093/gmo/9781561592630.001.0001/omo-9781561592630-e-0000022927>.（最終アクセス：2024/9/22）
- 9) Baines, A., Oliver, P., & Kirnbauer, M. (2001). Kazoo. *Grove Music Online*, <https://www.oxfordmusiconline.com/grovemusic/view/10.1093/gmo/9781561592630.001.0001/omo-9781561592630-e-0000014806>.（最終アクセス：2024/9/22）